

ビンナガ 南大西洋

Albacore Thunnus alalunga



管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

生物学的特性

- 最大体長・体重：尾叉長 130 cm、40 kg
- 寿命：10 歳以上
- 性成熟年齢：5 歳頃 (50%成熟年齢)
- 産卵期・産卵場：春～夏・南緯 10～25 度の南米大陸寄り
- 索餌期・索餌場：温帯域・南緯 25 度以南
- 食性：魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者：マグロ・カジキ類、サメ類、海産哺乳類

利用・用途

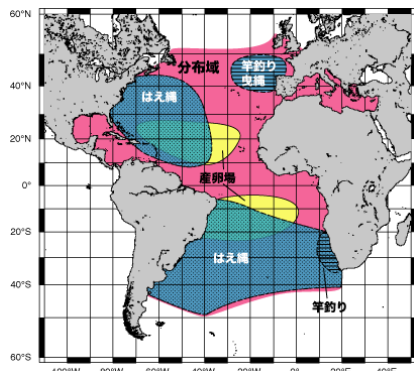
刺身や缶詰原料とされる。

漁業の特徴

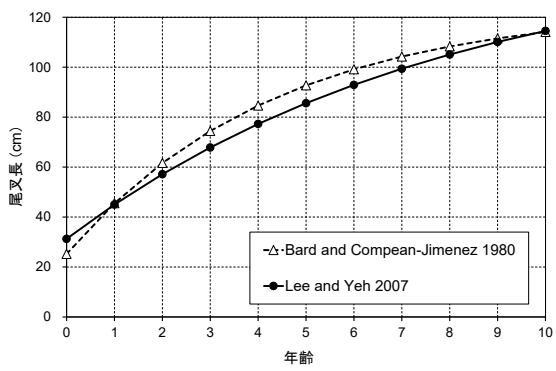
本資源を対象とする漁業は、1950年代後半の日本のはえ縄の大西洋への進出とともに始まった。1960年代には韓国や台湾のはえ縄が参入した。現在は主に台湾のはえ縄及びナミビアの竿釣り及びはえ縄によって漁獲されており、南アフリカの竿釣り、日本のはえ縄、ブラジルの竿釣りがこれに次ぐ。特に台湾のはえ縄の漁獲の割合は高く、1973年以降、概ね総漁獲量の6～9割を占めてきた。台湾船は伝統的に本資源を主対象として亜熱帯から温帯域の広い海域で周年操業してきたが、近年は本資源への漁獲努力の減少により、漁獲量が減少している。

漁獲の動向

総漁獲量は1960年代前半～1970年代には約2.0万～約3.5万トンの範囲で推移していたが、1980年代後半～2000年代初め頃には約2.6万～約4.0万トンとより高い水準となった。その後、大幅に減少し、2005年に1.9万トンとなった。2005年以降は、約1.9万～2.5万トンの範囲で推移していたが、2014年には約1.4万トンを記録した。近年の漁獲量の減少は、台湾のはえ縄船の操業対象種の変更に伴う本資源への漁獲努力量の減少に起因すると考えられている。2024年の漁獲量は約2.1万トンであり、過去5年間の漁獲量の平均(約2.2万トン)を下回り、総漁獲可能量(TAC)(2.8万トン)を下回った。日本の漁獲量は2011年以降、912～3,106トンの範囲で推移し、2024年は2,642トンであった。なお、2023～2026年の日本の国別漁獲割当は1,630トンとなっている。



大西洋のビンナガの分布と主な漁場



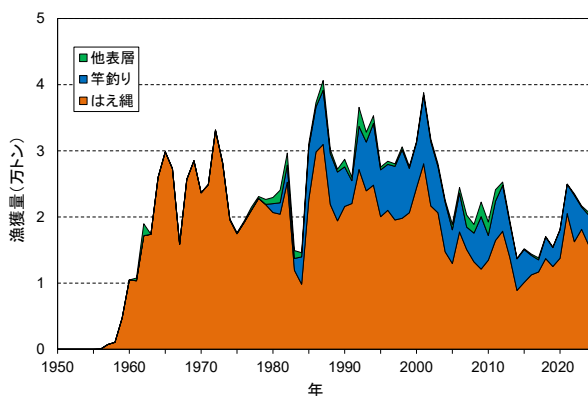
南大西洋におけるビンナガの成長曲線

資源状態

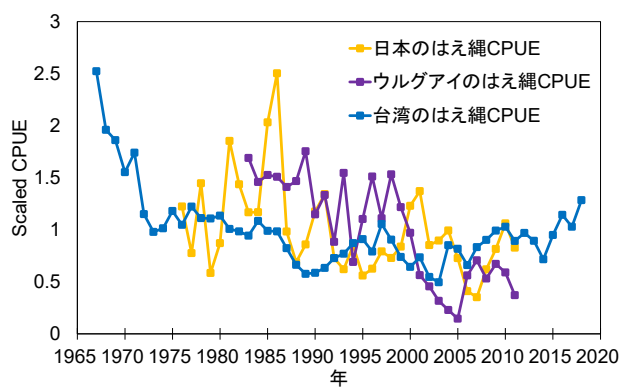
2020年にICCATで行われた最新の資源評価ではベイズアンプロダクションモデル（JABBA）によって解析が行われた。資源評価の結果、最大持続生産量（MSY）推定値の中央値は27,264トン（95%信頼区間：23,734～31,567トン）、相対資源量（ B_{2018}/B_{MSY} ）推定値の中央値は1.58（95%信頼区間：1.14～2.05）、相対漁獲係数 F_{2018}/F_{MSY} 推定値の中央値は0.40（95%信頼区間：0.28～0.59）と推定され、現在の資源状態は「過剰漁獲でありかつ乱獲状態である確率」はわずかに0.6%であることが示された。資源評価モデルで推定された資源量は2004年以降に堅実な増加傾向にあり、2018年の資源量は過去の平均水準ならびに初期資源量の59%まで回復していた。将来予測では、2033年までMSYレベルの2.7万トンで漁獲した場合、 $B > B_{MSY}$ 、 $F < F_{MSY}$ （即ち、神戸プロットの緑の領域になる）を維持する確率は90%と推定された。

管理方策

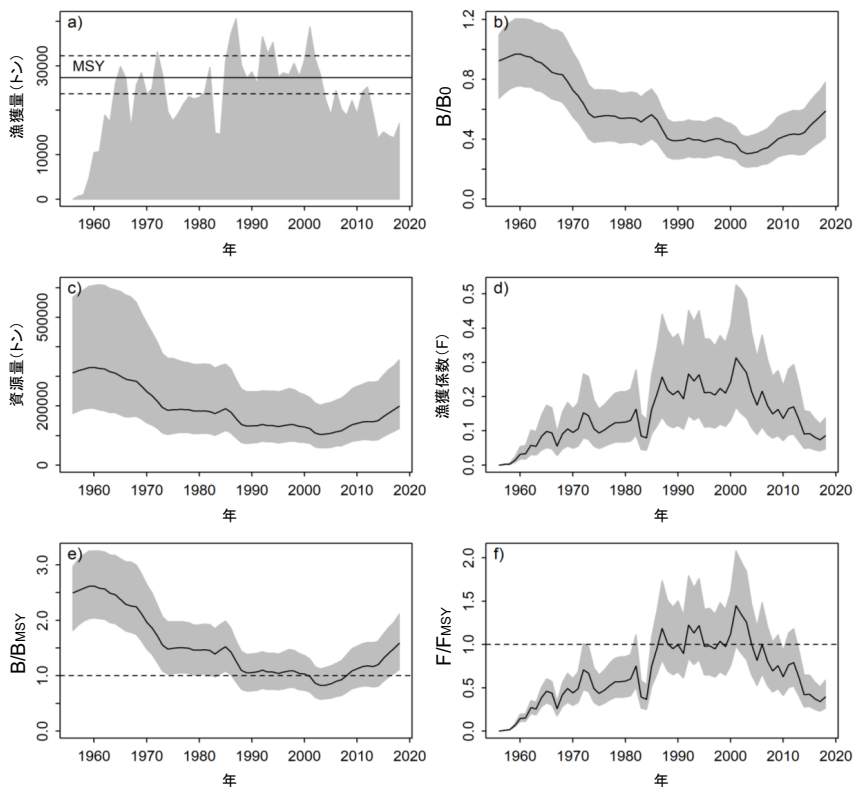
2022年のICCAT年次会合において、2023～2026年のTACを2.8万トン、日本の割当量を1,630トンと決定（更に他国からの委譲が計300トン）した。2024年のICCAT年次会合で採択された初期管理目標を定める決議に基づき管理戦略評価（MSE）の開発が進められており、2029年年次会合での管理手続き（MP）採択を目指している。



南大西洋におけるビンナガの漁法別漁獲量（1956～2024年）



2020年の資源評価に用いられた南大西洋ビンナガの標準化CPUE（1967～2018年）

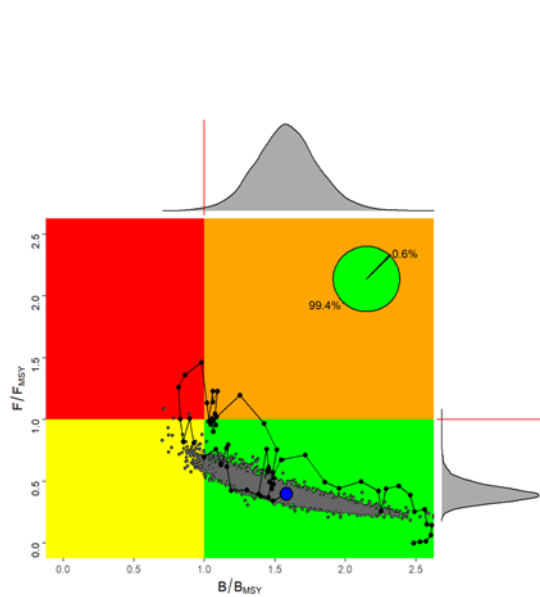


JABBAにより推定された南大西洋ビンナガの資源状態 a) 漁獲量、b) 初期資源量に対する資源量、c) 資源量、d) 漁獲係数、e) MSYを達成可能な資源量に対する相対的資源量、f) MSYを達成可能な漁獲係数に対する相対的漁獲係数

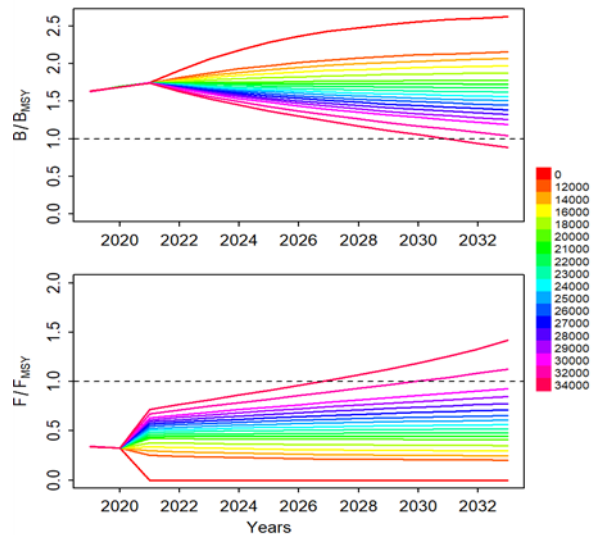
ビンナガ（南大西洋）の資源の現況（要約表）	
世界の漁獲量 （最近5年間）	18,084～24,968 トン 最近（2024）年：20,694 トン 平均：21,784 トン（2020～2024年）
我が国の漁獲量 （最近5年間）	912～2,642 トン 最近（2024）年：2,642 トン 平均：1,721 トン（2020～2024年）
資源評価の方法	ベイジアンプロダクションモデル（JABBA）
資源の状態 （資源評価結果）	$B_{2018}/B_{MSY}=1.58$ （1.14～2.05） $F_{2018}/F_{MSY}=0.40$ （0.28～0.59）*1 2018年の資源状態は、過剰漁獲及び乱獲状態ではない
管理目標	MSY：27,264 トン（範囲：23,734～31,567 トン）*2
管理措置	TAC：2.8万トン うち日本への割当分が1,630 トン、他国（ブラジル等）からの移譲分が300 トン（2023～2026年漁期）
管理機関・関係機関	ICCAT
最新の資源評価年	2020年
次回の資源評価年	2026年

*1 2020年資源評価結果より。ベースケースから推定した95%信頼区間。

*2 2020年資源評価結果より。ベースケースの推定値の範囲。



JABBAの神戸プロットと2018年の資源状態を確率として示した円グラフ



JABBAによる将来予測（2021～2033年）
上図は相対的資源量（ B/B_{MSY} ）と
下図は相対的漁獲係数（ F/F_{MSY} ）。
色線は漁獲量を0～34,000トンまで
変化させた際のそれぞれの将来予測軌道。
各線は15,000回のマルコフ連鎖
モンテカルロ法による
シミュレーション結果の中央値。